



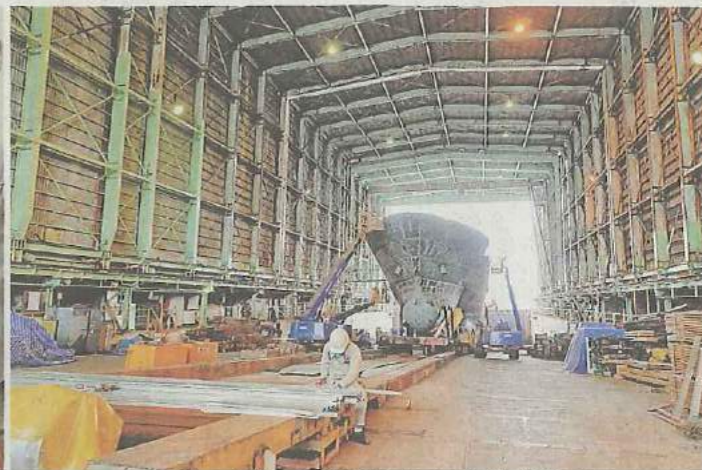
造船業は長崎県の基幹産業です。長崎市の長崎港には多くの造船会社があり、さまざま船を造っています。渡辺造船所は長崎市土井首町にあり、明治35(1902)年の創業。今年で118年目を迎える歴史のある会社です。私は入社8年目で設計部に所属しています。

造船所内の船を造る場所はドーム形で、どんな天気でも作業ができます。船は大きいもので全長約100m、5千トンクラスまで建造できます。どんな船を造っているかというと、大中型巻き網船などの漁船、貨物

使い方まで把握



急ピッチで工事が進むメロ船(左側)



ドーム形の建造場所。風雨から建造中の船や部品を守っています

いつも頭はフル回転

船、フェリー、液化石油ガス(LPG)などを載せる特殊船、エンジンが付いた押し船と台船が連結したプッシュバーなど。いろんなタイプ、大きさの船を造るので、その構造や使い方を完全に把握していないと設計はできません。

安全が一番大切

今、造っている船は、南極近くで体長1mを超え、深海魚「メロ」を捕



設計部では、パソコンの図面を共有しています

え縄で捕獲する「メロ船」です。全長約60m、約360トン。流水に当たっても壊れないように船体を頑丈にし、荒波にもまれても転覆しないような構造にします。

高いところなど危険な場所での作業を減らすよう工夫しています。設計ミスは絶対に許されないので、頭はいつもフル回転。船の部品を組み立てる生産部との連携も重要です。上司や先輩のアドバイスに耳を傾け、効率よく作業を進めなければなりません。

ひと安心と気合

私がメロ船を担当するのは初めて。このメロ船の拠点となる南アフリカの都市ケープタウンを訪れ、船主と打ち合わせを重ねています。海から引き上げたメロを滑り台で作業台まで移動させ、頭などを切り落とし、冷凍庫に入れる。効率よく作業できるように一生懸命、設計します。

熊本県生まれの長崎市育ち。造船の仕事に興味をもったのは小学生のころ。長崎港で自衛艦の進水式を見たのがきっかけです。進水式とは、大部分が完成した船を水に浮かべるセレモニーのことです。たくさんの人たちが完成を祝う華やかな雰囲気と船の大きさに引き込まれました。

船を造る上で一番大切なこと。命、つまり安全です。船に乗る人たちが海に落ちないような構造にすることがとても大事です。私たちが船を造るときも、

高校卒業後、長崎総合科学大工学部船舶工学科(当時)を経て、今の会社に入りました。社員数は関連会社を含めて約300人。みんなで力を合わせないと船は完成しません。チームワークが造船業の醍醐味です。

今でも進水式は特別な時間です。船が海に浮かぶ姿を見ると、ひと安心。船主から「頼んでよかった」と言ってもらえるよう、最後の仕上げに向けて気合が入ります。完成して引き渡した漁船から大漁の知らせが届くこともあります。そんなときは、とてもうれしいです。

将来の目標は、船のすべてを設計できるようにすること。安全で、美しく、速力が出る。そんな船を造りたいです。



船造りはチームワーク。社員同士が連携しています

「仕事が面白い」と話す林さん＝長崎市、渡辺造船所